



稼穡図屏風（部分）徳川綱吉筆



館長就任にあたって

松 浦 国 男

昨年5月、白井館長の急逝により同年7月より不肖館長に就任致しました。素よりその任ではないことは自らもよく知っておりますが、皆様方の御指導と御支援により、この大任を果していきたいと思います。

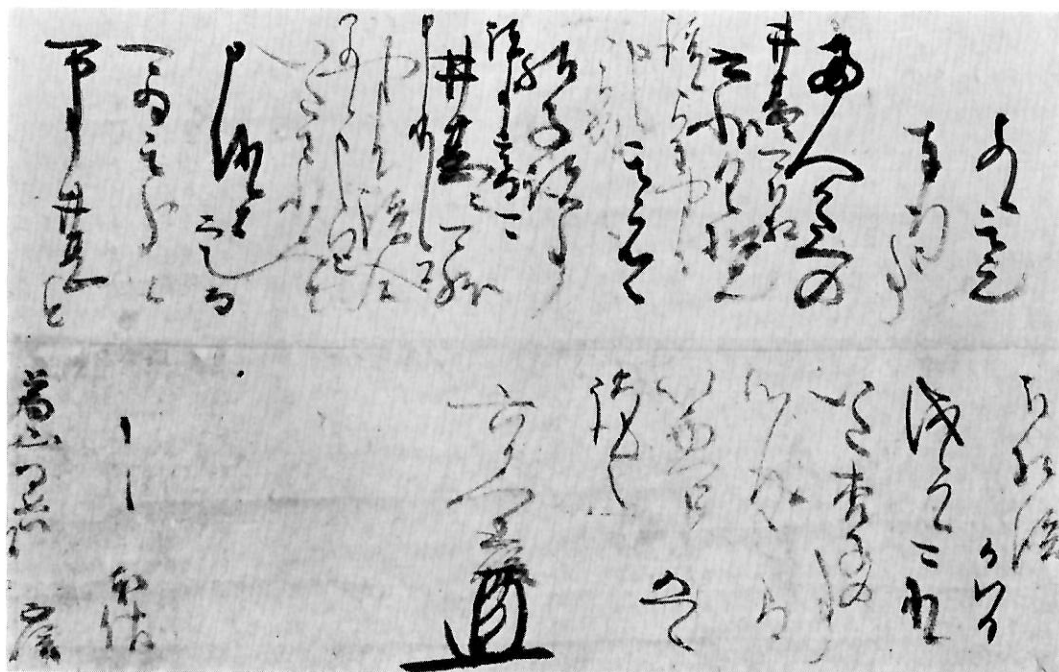
さて当館は、去る昭和40年4月、東照宮御祭神家康公薨後三百五十年祭を記念して設立され、登録博物館として既に11ヶ年を経過いたしました。その間、白井前館長の下に、文化財への理解と愛護啓蒙に努力を重ねてまいり、所期の目的を果しつつありますが、神社博物館としての運営につきましては、まだ充分とはいえません。

今後は、主として文化財の保存に遺憾なきよう鋭意努力し、巾の広い博物館活動を展開してゆく覚悟であります。前任者同様よろしく御協力の程お願い申し上げます。

史料紹介

『本多正信自筆書状』

学芸員 小 林 明



尚々其元
奉行之事
兩人々々への
井甚へ可被相
書狀具披見
談候よきやう
申候其元之
可被成候
様子諸事
諸事重而可
井甚ニ可然
申承候間
やうび談合
早々申候以上
いくされ候へと
申越候者定而
可爲其分候
万事井甚と

被相談

らハる

儀候ハ可承候

いく杏子の事

心得申候尚

以面可申候恐々

謹言

六月一日正信(本多)
(花押)

葛山(與々)□兵參

正信
本佐(本多佐渡守)

本文書は、本多佐渡守正信の自筆書状である。宛所は判読しがたいが、葛山與兵衛尉であろう。文中に見える「井甚」とは、井出甚助正次のことであるが、「兩人方」の兩人が何者なのか不詳である。恐らく正信の近臣であろう。また「いた杏子の事」の意味がわかりかねるのであるが、杏子はバラ科の落葉喬木で、春に紅白色の花を咲かせ、実は梅に似て大きく食用・薬用にされること、そして「杏林」が医者^{いしん}の異称であることを考えあわせると、「いた」は徳川家康の侍医であった板坂卜齋のことをさしたものでなかろうか。しかし、葛山が何故、卜齋を、あるいはその薬を必要としていたのか明らかでない。

とまれ、この書状は本多正信が葛山與兵衛尉の手紙を披見したのち、葛山が奉行としての諸事につき、正信の指図通り井出正次を相談相手として行っていることに満足し、何事も正次と相談した上で善処すべきことを命じた返信である。

本多正信は天文七年（1538年）三河国に生まれた。通称弥八郎、はじめ鷹匠として家康に仕えたのであるが、三河一向一揆に際し、主君家康に敵対して主家を離れ、のち再び帰参して家康の政治顧問として活躍した。『遺老物語』は「天下には偽をいはぬ役人一人なくて不叶、本多佐州一生偽をいはぬ人故に、諸事當時の大名佐州一言にて事調りし也」と正信の実直な人柄を伝えている。また正信は義理を存じた人物でもあったが、若い時分、ある戦さで比類なき軍功をあらわした折の手負がもとでちんばになった武人でもあった。元和二年（1616年）六月七日午之刻、七十九才の高齢で卒している（『本光国師日記』『東武実録』）。正信の自筆文書は希有で、本文書はその貴重な一通である。正信が従五位下佐渡守に叙せられたのは天正十四年（1586年）五月のことであり、従って本文書の執筆年代を天正十四年より元和二年の間におくことができるが、さらに井出甚助正次の没年が『慶長年録』『當代記』等により、慶長十四年（1609年）二月二十六日であることが知れるので、さらに慶長十三年（1608年）までに限定することができよう。

井出正次は『寛政重修諸家譜』巻第千百に「正次、甚助、藤九郎、甚助、志摩守、従五位下、母は興津氏の女。はじめ氏真につかへ軍功あり、天正十年東照宮甲斐国に御進発の時拝謁し、仰によりて駿河国の代官職となり後同国のうちにして舊領をたまふ。十八年（中略）このとしより駿河伊豆両国を支配す。文禄元年采地を伊豆国君澤郡のうちにうつされ三百石を知行す。四年より駿府の町奉行を兼、後従五位下志摩守に叙任す。慶長十四年二月二十六日駿府にをいて死す。年五十八（後略）」とあり、家康に属する以前は今川氏真に仕えていたらしいが、永禄十二年（1569年）三月八日付の北条氏政の上野筋に於ける正次の戦功を賞した感状（『白金井出文書』）も伝わるころから北条氏とも関係をもっていたと思われる駿河国の豪族であった。駿河伊豆代官兼駿府町奉行としての正次はその才腕を大いにふるったようであるが、公平さを欠くこともあったのであろう。『慶長年録』は正次の死を「二月廿六日、井出志摩守死、日来無病氣、頓病起立所如此、知行令代官出頭甚也、但悪人之由申候」と伝えている。

ところで、本文書の宛所を葛山與兵衛尉と推測するのは、葛山氏が『寛政重修諸家譜』『断家譜』等に記されておらず、わずかに『静岡県史料』に収められている葛山氏関係文書の中より、葛山氏が戦国時代に駿東郡を中心に活躍していたことが知れ、氏堯、氏元等の名を見い出すことができるが、天正年間には彼等の名が見当たらないかわりに、天正十八年（1590年）とされる十一月二十八日付の大久保忠隣加々爪政尚連署状（『舊辻坊葛山氏文書』）の文中に葛山與兵衛の名が見え、文禄二年（1593年）極月九日付の横田村詮手形の宛所も葛山與兵衛となっていてところから臆測したものである。また年末詳ながら三月十三日付の本多正信の葛山與兵衛宛書状（『舊辻坊葛山氏文書』）もあり、この文書が本文書との関連はないにしても、その文中に井出甚助の名が見えることからして執筆年代は本文書に近いものであることと思われる。故

に宛所の葛山氏を與兵衛尉と考えたいのである。

尚、本文書は折紙であったのを紙の中心を切り離して表装したもので、明治二十二年（1889年）八月、関口隆正氏が久能山東照宮へ奉納した七幅の一つにあたる。（紙本墨書、縦28.0×横43.6センチ）。

久能山東照宮元和年記録 釣灯笼の奉納者について

副館長 森 威 史

久能山東照宮に現存する元和年間奉納の釣灯笼は二対あり、いずれも金銅製である。

大正十三年の『釣灯笼調書』には、拝殿廊下左右にある盛徳院奉納の一对と、日枝神社（元本地堂）前にある松平仙松奉納の一对とが記載されているが、日枝神社前にある釣灯笼は松平仙松と松平下総守清匡が一基つつ奉納していることが調査の結果判明した。

拝殿前の釣灯笼に刻まれている銘は次の通りである。

○向って右側のもの

奉寄進金燈籠

丁巳四月吉辰

施主

加納 盛徳院

東照大権現

維時元和三年

○向って左側のもの

奉寄進金燈籠

維時元和三年

丁巳四月吉辰

東照大権現

施主

加納 盛徳院



左 側



右 側

この釣灯笼の奉納者加納盛徳院は家康の長女亀姫である。亀姫は永禄三年駿府で生まれた。母は築山殿（関口氏）である。当時家康は元康と称しており十九才であった。この永禄三年五月十九日に今川義元が桶狭間で戦死しているが、亀姫の生まれた日が、それ以前か以後か明らかでない。元康は桶狭間の役後岡崎城に入り、駿府には帰らず、やがて今川氏の宿敵である織田信長と結んだため、亀姫と兄竹千代（信康）とは、母築山殿と共に今川氏真の人質として扱われることとなった。しかし、永禄五年、家康は久松俊勝・松井忠次に命じて今川氏真の従兄弟にあたる鵜殿長照が守る三河国の西郡城を攻めさせ、長照の二子氏長と、氏次を捕え、石川数正のはからいでその二人を駿府に帰し、引換えに亀姫・信康・築山殿の三人を岡崎城に迎えた。

天正三年五月、武田勝頼は長篠城の奥平信昌を攻めたが、城外の設楽原において織田・徳川連合軍に大敗した。この時、奥平信昌は小勢をもって大敵を引き受け、城を固守して大勝の機運をつくったことは、長篠の籠城として喧伝せられている。『東照宮御実紀巻二』に「古今稀なる大功なり。信長より一字を授けられ、これより信昌とあらためたり。（世には九八郎はじめ貞昌といひしが、此時信昌とあらたむといふ。されど貞昌は曾祖の諱なり。その家伝には定昌

と書しといふ)。(家康)君よりも大般若長光の刀に三千貫の所領をそへて給ふ。又信昌が妻は
そのかみ武田が家へ質子としてあるけるを勝頼磔にかけし事なれば、このたび第一の姫君を
(亀姫と申)信昌にたまわり御簪となさる」とあり、また『貞享書上』に「定昌には作手・田
嶺・長篠・吉良・田原の内、遠州・刑部・吉比・新庄・山梨・高辺等の地若干下され、姉川の
役に信長より進らせし大般若長光の御刀をも下され、又信長より申さるる旨あるにより第一の
姫君もて定昌と結婚した。このとき亀姫は十七才、信昌は二十二才であった。信昌は、同年三
河国新城に城を築いて住んでいたため、亀姫はその新城城に入興したのである。

天正十八年、家康が関東に移封した際、信昌は上野國小幡に三万石の地を賜わり宮崎城に移
住したが、関ヶ原の役後の慶長六年三月には美濃国加納に十万石を領した。亀姫は美濃に移っ
てのち、加納御方・加納御前と称され、同国厚見郡内に三千石の化粧料を与えられている。

元和元年三月十四日、信昌が六十一才で歿すると、亀姫は尼となって盛徳院と称した。五十
六才の時である。それからわずか一年後の四月十七日に、父である家康が歿したのであった。
したがって東照宮に奉納した釣灯籠の銘に「加納盛徳院」とあるのはそのためである。

奥平信昌と亀姫との間には四男一女がある。長男家昌は家督を継ぎ、次男家治は家康の養子
となって松平の称号と諱の一字を与えられたが十四才で歿した。三男忠政は菅沼定利の養子と
なり、四男忠明は家康の養子となって松平の称号を与えられ、また長女は大久保忠常の室とな
っている。

長男家昌は、慶長六年十二月二十八日、下野国宇都宮城十万石に転封され、亀姫も一緒に住
んでいたが、家昌は同十九年十月十日三十八才で歿した。この家昌の長男忠昌は慶長十三年に
宇都宮で生まれ、七才のときに父の遺領を継ぎ、元和五年十月、下総国古河に転封され、加増
があつて十一万石を領したが、同八年八月、古河からふたたび宇都宮城に復した。盛徳院はこ
の間、古河に移るとき、弟である將軍秀忠より土井利勝を遣わして慰問したことがあるから、
孫の忠昌と共に古河に住んでいたと思われる。しかし、それより六年後の寛永二年五月に病氣
になり、また土井利勝が見舞いに來たときには、忠昌は宇都宮に帰っており、盛徳院は旧領地
である美濃に移り住んでいたらしく同月二十七日、加納で歿した。年は六十六才、法名を盛徳
院香林慈雲大禪定尼という。

日枝神社前の釣灯籠は、向って右側が松平下総守清匡、向って左側が松平仙松の奉納になる
もので次の銘がある。

奉寄進金燈籠
維時元和三年
丁巳三月吉辰
施主 源朝臣
松平下総守清匡
東照大権現

奉寄進金燈籠
丁巳四月吉辰
東照大権現
施主
松平仙松
維時元和三年

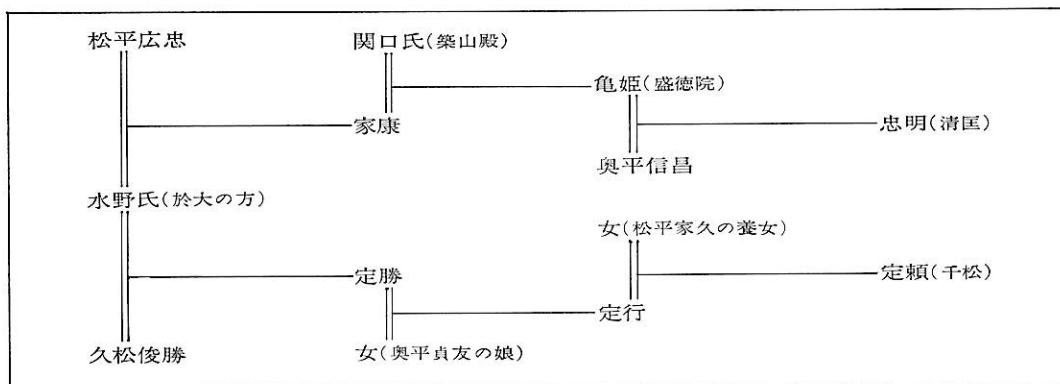


本殿 左



本殿 右

松平清匡は奥平美作守信昌の四男で、母は先の盛徳院すなわち亀姫である。天正十一年三河



国新城で生まれたが、その知らせを聞いた家康は逢って自分が名前を付けようと申し出ている。そして、母亀姫とともに駿府に行き、駿府城の大奥で初めて家康とあい、“鶴松丸”という名前と刀を賜った。

天正十六年、兄の家治と一緒に家康の養子となり、松平の称号を賜わり、代々松平を称した。文禄元年、兄の家治が歿したためその所領地である上野国長根の地七千石を得、その時献上品を奉ったために二代將軍秀忠より親筆の書を賜わり、さらに慶長四年三月十一日には諱の一字をもらって忠明と名前をあらためた。翌慶長五年四月七日に従五位下下総守に叙任し、九月には父奥平信昌について関ヶ原の役に出陣し、初陣を飾った。

慶長七年九月に所領改めがあり、一万石を加増されて、近江・三河両国のうち一万七千石をうけ、三河国作手に住んだが、同十五年七月二十七日には伊勢国亀山の城をたまわり、作手から移っている。ここでまた加増され、伊勢国鈴鹿・三重・安藝・一志・河曲及び三河国設楽六郡のうち五万石を領した。慶長十七年三月二十六日には、家康より御料の甲冑、石火矢十二挺、火銃砲十二挺、銃砲三百挺ほか弓鎗、番具足など多数を賜った。外孫に対する家康の愛情のあらわれとも思えるような贈り方である。

大坂冬の陣には美濃国の諸軍を率いて亀山を出発し、多大な功績を果たした。元和元年六月十日に封地をあらためられ、摂津・河内両国のうち、加増され十萬石を領し、大坂城をも賜った。

元和三年四月、二代將軍秀忠が日光山に参拝した時、大坂より日光へ向っている。久能山の釣灯籠はこの途中で奉納されたと思われるが、当時松平忠明を名のっているのに、いかなる理由で「松平下総守清匡」と銘を入れたか理解出来ない。

この年、忠明は摂津国天満の川崎に東照宮を造営している。

元和五年、大坂から大和国郡山に改められ、寛永十六年三月三日には郡山から播磨国姫路城に移封して十八萬石を領したが、正保元年三月二十五日、六十二才で歿した。法名を心巖玄鐵天祥院という。

松平氏で、仙松を名のる人は二人いる。一人は松平定行で、もう一人はその子定頼である。松平定行は元和三年の時点ではすでに定行を名のっているのに、釣灯籠に銘記されている仙松は松平定頼とみてよいであろう。

定頼は松平定行の長男で、慶長十二年掛川で生まれた。釣灯籠の奉納時は十一才で、仙松を称している。二代將軍秀忠が、この年の六月に入洛する際、掛川城で仙松に会い、刀を与えているのは、おそらく釣灯籠を奉納したからではないかと思われる。仙松の祖父定勝は家康と異父兄弟の関係にあるので、そのすじから言えば、仙松が灯籠を奉納しても決しておかしな事とはいえない。

元和九年、三代将軍家光が上洛する途中、愛知県にある桑名城に寄り、同城に居た仙松に刀を与えている。さらに寛永三年に将軍が上洛した折には、仙松も将軍に従って上洛し、八月十九日に従五位下河内守に叙任した。九月には将軍の御参内の供奉をつとめている。萬治元年二月十八日に父定行の封を襲ぎ、四月五日に襲封のあいさつのため参上した際には家臣三人も御前に出ることをゆるされた。同四月十九日にはじめて領地におもむくための暇を賜い、二十八日に父定行に継いで長崎のこと（南蛮船の指揮）をうけたまわった。そして萬治二年十二月二十五日には従四位下に昇り、次いで寛文元年十二月二十五日には従隠岐守にあらためられている。しかし翌寛文二年正月二十二日に五十六才で没し、松山の大林寺に葬られた。室は京極丹後守高広の娘である。

松平定頼が久能山東照宮に参拝したという記録はないが、釣灯笼を奉納した仙松はこの松平定頼とみてよいであろう。

神前に献火するための器具である灯笼は、照明用として使われると同時に除災招福の意味をも持っていた。初期の灯笼は、古い神社でたまに見ることが出来るように、単に石柱の上部に油をためる凹みをつけただけのものであった。

献火用としての灯笼には石製のものと、金属製のものがある。石製の灯笼で最古とされているものは奈良時代後期のものがある。当麻寺の金堂前にある八角形の灯笼がそれである。

春日大社にある柚の木灯笼はやや時代がさがるが、鎌倉時代にはいると、花崗岩で作られたものが多くなり、装飾性を増したものが出てくるようになった。やがて形態上にも大きな変化が生じ、聖火をとぼす本来のものから装飾的な色彩の濃いものとなっていった。

金属製の灯笼で最も古いものは、奈良の大仏殿の前にある灯笼で、その後大きな灯笼が京都の鑄工たちによって作られた。桃山時代には鉄製のものの他に青銅製のものが多く作られるようになった。青銅製のものが多く作られたのは鉄にくらべて製作しやすいためであった。上野東照宮に奉献されている五十一本の青銅製の灯笼は徳川家康の三十六回忌に諸大名から奉納されたものであり、家光の三回忌には四十本もの献納がある。

厳島神社や春日大社に沢山ある釣灯笼は金属製のもので、中には正平二十一年（1366）の銘が入った青銅製のものもある。また、天文十四年（1545）の銘がある富岡観音堂の青銅製の釣灯笼は、火袋の一枚の扇のほかはすべてが一度に鑄造されている。江戸時代になって釣灯笼はさかんに造られ、一般の家屋にまで用いられるようになった。神社に奉納されている灯笼は江戸時代を通じ現代にいたるまで伝統的に同じ形態をもちつづけている。

久能山東照宮の社殿及び透塀内にさげられた釣灯笼は、すべて金銅製の一度に鑄造されたもので、ここで取りあげた拝殿前と日枝神社前の釣灯笼だけが他のものより大型に出来ている。久能山東照宮にある灯笼で元和年間に奉納されたものは、石製と金銅製をあわせて五十四基ある。

廟所および唐門下にある金銅製の灯笼は幕府の献納したもので、それ以外は諸大名によって献納されたものである。

したがって、家康に最も関係の深い人間が、元和年間に、しかも、拝殿と日枝神社本地堂前に献奉した事実はいわば当然のことといえよう、盛徳院は家康の子として、松平清匡は孫として、松平仙松は家康の異父兄弟である奥平定勝の孫として、家康の遺徳を慕って献納したと考えてよいであろう。

博物館のあゆみ

昭和47年度

館内業務

1. 特別展

○久能山東照宮の名宝展

会期＝昭和47年6月9日～8月31日

徳川家康の遺品を中心とした展示。

○徳川将軍の甲冑と刀剣展

会期＝10月1日～12月31日

徳川将軍の所用した甲冑と刀剣の優品を展示。

○刀装と兜展

会期＝昭和48年1月1日～3月31日

刀剣類の外装と様々な兜をわかりやすく展示。

2. 友の会活動

4月 懇親会へ参加。

7月 日本史を語る集いへ参加。

8月 第7回文化財入門講座「甲冑の歴史と取扱い方」へ参加。

10月 戦国武将の手紙を読む会へ参加。

2月 映画会に参加し「美しき国土」「神々のふるさと」を鑑賞。

3月4日 第2回会員研究発表会（歴史と美術を語る集い）へ参加。

3月21日 映画会に参加し「和鋼風土記」「高天神」を鑑賞。

3. 文化財入門講座（第7回）

・期日＝昭和47年8月27日

・講題「甲冑の歴史と取扱い方」

・講師 当館主任 森威史氏

日本通運美術品担当課長 長谷川正夫氏

4. 博物館資料の寄贈について

○昭和47年8月31日 徳川慶朝氏より徳川慶喜所用太刀銘^{平安城長吉作}（糸巻太刀拵付）一口
曆応二年八月日
が寄贈された。

○10月1日 徳川慶朝氏より徳川慶喜自作煙草入れ一個が寄贈された。

○11月9日 実石芳雄氏より脇指銘倫光（拵付）一口が寄贈された。

5. 刀剣類定期手入れについて

昭和47年8月10日 掛川市の刀剣研磨師池田猪太郎氏の手により行われた。

館外業務

1. 特別展

○「戦国三傑展」

会期・昭和48年3月28日～4月4日

会場・静岡市 西武百貨店

主催・当館

戦国の三英傑（信長秀吉家康）の関係遺品資料約70点を展示。

2. 巡回展

○「徳川十五代将軍展」

会期・昭和47年4月8日～5月7日

会場・岡山城天守閣

主催・岡山市 山陽新聞社

徳川家康画像他66点を出品。

○「徳川十五代甲冑と刀剣展」

会期・昭和48年1月3日～10日

会場・北九州市 井筒屋八幡店

主催・(株)テレビ西日本

重要文化財伊予杵黒絲素懸威胴丸他70点を出品。

○「徳川歴代将軍展」

会期・1月4日～9日

会場・大阪市 阪神百貨店

主催・大阪日日新聞社

○「徳川歴代将軍展」

会期・1月18日～22日

会場・姫路市 山陽百貨店

主催・神戸新聞社

国宝太刀銘真恒 重要文化財白檀塗具足等70点を出品。

3. 資料の出品について

○「徳川家の名宝展」

会期・昭和47年4月29日～6月28日

会場・日光東照宮宝物館

後水尾天皇宸翰御神号他42点を出品。

○「家康と勝成展」

会期・10月9日～11月12日

会場・福山城博物館

重要文化財短刀無銘貞宗作他34点を出品。

○「武家と町人展」

会期・昭和48年1月2日～8日

会場・青森市 松木屋百貨店

香箸・香合・陣羽織等8点を出品。

○「鉄砲五百年展」

会期・3月2日～7日

会場・北九州市 井筒屋百貨店

家康所用火縄銃一挺を出品。

○「日光伝統美術工芸展」

会期・3月26日～5月31日

会場・日光東照宮宝物館

家康所用耳盥・櫛・文庫等23点を出品。

4. 静岡県博物館協会総会について

期日・昭和47年7月4日

会場・駿府博物館

昭和47年度総会が開催され、白井館長、松浦副館長、森主任が出席。

5. 東海地区博物館連絡協議会総会について

期日・昭和47年9月9日～10日

会場・岐阜県郡上郡明方村

昭和47年度総会が開催され、白井館長、松浦副館長、森主任が出席。

6. 全国博物館大会について

期日・昭和47年9月19日～21日

会場・北海道札幌市

第20回大会が開催され、松浦副館長、森主任が出席。

7. 学芸職員研究集会について

期日・昭和48年2月24日

会場・駿府博物館

静岡県博物館協会の主催で開催され、森主任、小林学芸員が出席。

庶務報告

1. 昭和47年度入館者状況（但し、有料者のみ）

区 分 月	大 人	小 人	団 体	計
4 月	12,363	1,824	1,338	15,525
5 月	9,827	653	1,894	12,374
6 月	5,604	213	653	6,470
7 月	4,339	458	239	5,036
8 月	8,460	2,448	208	11,116
9 月	5,868	448	797	7,113
10 月	7,871	429	2,446	10,746
11 月	6,914	366	936	8,216
12 月	2,951	191	309	3,451
1 月	8,881	1,174	30	10,085
2 月	5,854	263	97	6,214
3 月	9,532	1,612	766	11,910
計	88,464	10,079	9,713	108,256

2. その他

○6月14日～16日 第5回全国博物館学芸職員研究集会に小林学芸員出席。

○3月17日 早稲田大学教授荻野三七彦氏他7名、当館所蔵の古文書古記録閲覧のため来館。

昭和48年度

館内業務

1. 特別展

○久能山東照宮の指定文化財展

会期＝昭和48年4月15日～6月30日

当館の所蔵する国宝・重文・県文の総てを一同に公開。

○徳川家の甲冑展

会期＝昭和49年1月1日～3月31日

当館所蔵の甲冑類の中より、徳川将軍ゆかりの名品26点を展示。

2. 友の会活動

○4月1日 「戦国三傑展」（会場・西武静岡店）を個々に見学。

○4月22日 映画会に参加し「アイヌの結婚式」「北海道の自然」を鑑賞。

○5月5日 映画に参加し「ホソのアジア旅行」「ムーミン」を鑑賞。

○5月20日 第8回文化財入門講座「古文書入門」へ参加。

○6月3日 映画会に参加し「静岡県新風土記」「和菓子」を鑑賞。

○6月10日 「家康と遠江展」（会場・浜松松菱百貨店）を個々に見学。

○7月8日 映画会に参加し「母と息子の対話」「おやじの日曜日」を鑑賞。

○7月15日 第1回友の会大会へ参加。

○8月16日 映画会に参加し「ヒロシマ原爆の記録」「生命」を鑑賞。

○8月18日～20日 中世文書演習会へ参加。

○9月9日 第9回文化財入門講座「日本の服飾」へ参加。

○9月15日 映画会に参加し「近代百年のあけぼの総集編」「良寛をもとめて」を鑑賞。

○9月16日 映画会に参加し「京都の川」「よみがえる金色堂」を鑑賞。

○9月30日 第3回友の会研究発表会へ参加。

○10月7日 「山田長政展」（会場・駿府博物館）を個々に見学。

○10月14日 映画会に参加し「古代の美」「飛鳥美術」を鑑賞。

○11月3日 映画会に参加し「天平美術」「平安美術」を鑑賞。

○11月4日 映画会に参加「鎌倉美術」「室町美術」を鑑賞。

○11月11日 第1回県下の寺社巡りへ参加し、清水市の清見寺、承元寺を見学。

○12月9日 映画会に参加し「桃山美術」「江戸美術」を鑑賞。

3. 文化財入門講座

○第8回文化財入門講座

・期日＝昭和48年5月20日

・講題「古文書入門」

・講師 静岡大学教授 若林淳之氏

○第9回文化財入門講座

・期日＝昭和48年9月9日

・講題「日本の服飾」

・講師 国学院大学教授 鈴木敬三氏

4. 博物館資料の寄贈について

○昭和48年4月16日 実石芳雄氏より軸物数点が寄贈された。

○5月27日 一ノ瀬てる氏より沢庵自賛画他1点が寄贈された。

5. 刀剣類定期手入れについて

昭和48年10月11日 掛川市の刀剣研磨師池田猪太郎氏の手により行われた。

館外業務

1. 特別展

○「戦国三傑展」

会期・昭和48年3月28日～4月4日

会場・静岡市 西武百貨店

主催・当館

2. 巡回展

○「徳川十五代甲冑と刀剣展」

会期・昭和48年4月1日～8日

会場・徳島市 つば美屋百貨店

主催・徳島新聞社

重要文化財白檀塗具足、稼穡図屏風等67点を出品。

3. 資料の出品について

○「日光の伝統美術工芸展」

会期・昭和48年3月26日～6月9日

会場・日光東照宮宝物館

○「家康と遠江展」

会期・6月8日～18日

会場・浜松市 松菱百貨店

東照大権現像、木刀、鉛筆等40点を出品。

○「大名家名刀展」

会期・7月22日～8月12日

会場・BSN新潟美術館

徳川家康並十六将図を出品。

○「信長と秀吉展」

会期・10月14日～11月11日

会場・大阪城天守閣

重要文化財伊予札黒絲素懸威胴丸・脇指無銘行光作を出品。

○「日本の甲冑展」

会期・12月30日～1月27日

会場・熱田神宮宝物館

伊予札黒絲素懸威二枚胴具足を出品。

○「勝海舟展」

会期・昭和49年1月4日～9日

会場・北九州市 井筒屋小倉店

徳川慶喜画像他4点を出品。

4. 静岡県博物館協会総会について

期日・昭和48年7月6日

会場・浜松市美術館

昭和48年度総会が開催され、白井館長、松浦副館長、森主任が出席。

5. 東海地区博物館連絡協議会総会について

期日・昭和48年 7 月12日～13日

会場・愛知県蒲郡市

昭和48年度総会が開催され、松浦副館長、森主任が出席。

6. 全国博物館大会について

期日・昭和48年10月11日～14日

会場・兵庫県民会館

第21回大会が開催され、白井館長、松浦副館長、森主任が出席。

7. 学芸職員研究集会について

期日・昭和49年 3 月26日～27日

会場・富士美術館

静岡県・神奈川県両博物館協会共催で開催され、森主任、小林学芸員が出席。

庶務報告

1. 昭和48年度入館者状況（但し、有料者のみ）

区 分 月	大 人	小 人	団 体	計
4 月	6,816	1,063	209	8,088
5 月	5,835	878	843	7,556
6 月	3,938	206	400	4,544
7 月	3,390	353	322	4,065
8 月	5,548	1,914	103	7,565
9 月	3,973	444	328	4,745
10 月	3,941	298	1,200	5,439
11 月	4,309	427	943	5,679
12 月	2,376	166	148	2,690
1 月	5,518	909	129	6,556
2 月	5,091	655	530	6,276
3 月	7,453	1,350	512	9,315
計	58,188	8,663	5,667	72,518

2. そ の 他

○4月1日より入館料を下記のごとく改正。

大人 150円・小人 70円（団体 大人 120円・小人 50円）。

○4月27日 松浦副館長が東海大学人体科学博物館の開館式に出席。

○7月10日 国学院大学博物館学講座受講生50名が博物館見学のため来館。

○7月29日 森主任、佐野美術館の博物館学研究会に出席。

○9月25日 森主任、浜松市美術館の学芸職員研究会に出席。

○9月26日 森主任、清水文化会館建設準備委員会の要請で名古屋市の施設を視察。

○10月1日～12日 森主任、清水市教育委員会の依頼により横砂遺跡発掘調査に参加。

○日本博物館協会東海支部評議員選出に当り、当館長白井光男が評議員に選出された。

昭和49年度

館内業務

1. 特別展

○久能山の歴史展《開館10周年記念特別展》

会期＝昭和49年4月1日～5月10日

久能寺・久能城・久能山東照宮の歴史を明らかにする資料約100点を財団法人徳川黎明会・鉄舟寺・恵林寺をはじめとする全国の所蔵者各位の御協力のもとに展示。

○徳川将軍の名宝展

会期＝昭和50年1月1日～3月31日

徳川歴代将軍の所用した甲冑・刀剣・染織品の名品を中心とした展示。

2. 友の会活動

4月 特別展「久能山の歴史展」を見学。

12月 教育映画「駿府と家康」を鑑賞。

2月 懇親会へ参加。

3. 図録の発刊について

○資料集3「久能山の歴史図録」を4月1日に発刊する。

4. 教育映画「駿府と家康」の製作について《開館10周年記念》

徳川家康の真の姿と静岡に於ける功績を顕彰するため製作。12月完成。(16mmカラー作品)

5. 刀剣類定期手入れについて

昭和49年11月11日 掛川市の刀剣研磨師池田猪太郎氏の手により行われた。

館外業務

1. 巡回展

○「久能山東照宮展」

会期・昭和49年4月28日～5月19日

会場・島根県立博物館

主催・同上

重要文化財白檀塗具足・脇指無銘行光作等90点を出品。

2. 資料の出品について

○「世界の鉄砲展」

会期・昭和49年4月19日～24日

会場・東京 京成百貨店

徳川家光所用試し胴具足を出品。

○「駿府と海舟展」

会期・5月20日～6月30日

会場・駿府博物館

徳川家茂所用陣羽織、徳川慶喜画像・勝海舟所用短刀等13点を出品。

○「勝海舟展」

会期・8月10日～20日

会場・ジャスコ秋田店

徳川慶喜所用太刀・書幅他2点を出品。

○「駿府御分物刀剣と戦国武将画像展」

会期・10月6日～11月4日

会場・徳川美術館

重要文化財革柄織色鞘刀・脇指無銘行光作・短刀無銘貞宗作他2件を出品。

○「第5回熱田神宮文化史展“江戸時代に見る熱田”」

会期・10月10日～11月10日

会場・熱田神宮宝物館

東照大権現像・太政官符を出品。

○「勝海舟展」

会期・10月12日～16日

会場・長崎市 浜屋百貨店

徳川家茂所用陣羽織、徳川慶喜所用太刀他2点を出品。

○「元禄太平記展」

会期・昭和50年1月4日～8日

会場・北九州市 井筒屋八幡店

徳川綱吉所用甲冑・刀剣等7点を出品。

3. 静岡県文化財保存協会総会について

期日・昭和49年6月10日

会場・清水市 三保文化ランド

昭和49年度総会が開催され、松浦副館長、森主任が出席。

4. 静岡県博物館協会臨時役員会について

期日・昭和49年6月27日

会場・駿府博物館

白井会長の急逝により臨時役員会が開かれ、松浦副館長、森主任が出席。席上、松浦副館長が新会長に選出される。

5. 全国博物館大会について

期日・昭和49年10月2日～4日

会場・静岡県民会館・教育会館

第22回大会が本県にて開催され、当館に於ては10月3日、記念講演が行われた。

庶務報告

1. 昭和49年度入館者状況（但し、有料者のみ）

区 分 月	大 人	小 人	団 体	計
4 月	5,311	1,078	267	6,656
5 月	5,129	704	690	6,523
6 月	4,421	202	420	5,043
7 月	2,057	274	0	2,331
8 月	5,705	1,840	66	7,611
9 月	5,152	386	392	5,930
10 月	5,537	233	501	6,271

11 月	5,726	488	485	6,699
12 月	2,776	187	178	3,141
1 月	7,588	1,082	99	8,769
2 月	6,991	465	184	7,640
3 月	10,928	2,048	612	13,588
計	67,321	8,987	3,894	80,202

2. その他

○5月3日 白井光男館長急逝。

○松浦国男副館長，昭和49年6月24日付にて館長に就任。

○6月26日 高松宮殿下御来館。



徳川慶朝氏より寄贈された徳川慶喜所用の太刀の拵

この太刀は十五代將軍慶喜が元治元年(1864)九月五日，蛤御門の乱の時の功をねぎらって，孝明天皇から賜ったものである。

刀身の作者は南北朝時代に山城国に住した平安城一派を代表する刀工長吉である。

表紙写真解説

稼穡図屏風（部分） 徳川綱吉筆

狩野派の画家の筆になる「四季耕作図」はすこぶる多い。本図も，狩野探幽について画技を収得した綱吉の作と伝えられるものである。右双に田植え，左双に稲刈・脱穀等の中国の農村の姿が生き生きと描かれている。恐らく綱吉は本図を筆にするにあたり，狩野派の作品を模したか，参考にしたことであろう。紙本着色。

久能山東照宮博物館報

— 第6号 —

昭和50年3月31日 発行

編集発行 久能山東照宮博物館

〒422 静岡市根古屋 390

TEL 0542 (37) 2 4 3 7